

大学ラグビーにおける「対抗戦」と「リーグ戦」の成立史に関する研究

A study on the development of “Inter school match group” and “League match group”

1K04B091-7

後藤 悠太

指導教員

主査 石井昌幸先生

副査 寒川恒夫先生

はじめに

「対抗戦グループ」・「リーグ戦グループ」という関東大学ラグビーに見られる特質が生まれた経緯、関東大学ラグビーの発展に与えた影響を考察していき、それらをふまえた上で現在の大学ラグビーは今後どのように発展していくかを、文献、および協会関係者の証言をもとに、関東大学ラグビーの文化特性という点から読み解いていきたい。

第一章 「対抗戦グループ」の成立

1, 大学ラグビーの対戦形式

現在、関東大学ラグビーは関東協会主催の下、所属する大学を「対校戦グループ」「リーグ戦グループ」の2つに分け、試合を行っている。これらのグループでは順位の決定方法などに微妙な違いがある。また、グループを越えての公式試合は基本的に行われることはない。

2, 対抗戦各校の成立 ー明治32年から昭和19年ー

日本ラグビーは明治32年慶應義塾ではじまり、続いて三高、同志社、大正時代には、早稲田、東大、東商大、明治など多くの大学にラグビー部ができ、お互いに定期戦を行うようになり、「対抗戦」という形が作られていった。

3, 統括機関の誕生

第6回極東選手権への参加、秩父宮賜盃の拝受母体の必要性などが要因となり、関東協会、西部協会、日本協会が相次いで誕生した。関東協会は、昭和3年度から大学間の定期戦をまとめ、慶早明東立の5大学による関東5大学対抗戦、昭和8年度から法、東商大を加え、関東7大学対抗戦を組織していった。

4, 総力戦がもたらした影響

日本は昭和6年の満州事変を期に、戦争への道を歩んでいき、日本協会は大日本体育会蹴球部に吸収されていった。

第二章 新興校の台頭と「リーグ戦グループ」

1, ラグビー界の復興

戦後ラグビー第1戦は昭和20年に関西で行われた。翌21年には伝統の定期戦も復活し、11月23日に早慶戦が行われ、戦後ラグビーが軌道に乗り始めた。

2, 新興校の台頭と不満

教育大、中央、日本の各大学が、早慶明東立法の過去の6大学に台頭しはじめ、早明の下に伝統校、新興校が入り乱れる形となった。これらの新興校は、伝統校と思うように試合を組めないことに不満を持ち、

門戸解放が叫ばれたが、早慶は試合数の関係から難色を示した。

3, 「リーグ戦グループ」の成立

昭和32年から関東大学ラグビーの対戦形式は、上位、下位の2部制や、全大学で義務試合、任意試合を規定数こなす対抗戦方式など改正が繰り返され、昭和43年に現在の「対抗戦グループ」・「リーグ戦グループ」という対戦方式が生まれた。その成立には古くからの伝統であった「対抗戦」に強く固執する旧5大学と新興校の間のスケジュール問題が強く影響している。

第三章 二方式依存が大学ラグビーに与えた影響

1, 人気維持への効果

早慶明の伝統の対抗戦を、現在の対戦方式によって「対抗戦グループ」としてまとめることによって、高い人気を持つ対戦を必ず行うことができ、現在の大学ラグビーの人气が維持されている。

2, 競技レベル向上面での弊害

昭和43年の分裂以降、61年の大東文化大の優勝まで18年間、「リーグ戦グループ」から大学選手権優勝校がでてくることはなく、「対抗戦グループ」・「リーグ戦グループ」の区分が競技レベル向上の障害となっている。

第四章 これからの関東大学ラグビーの発展に関する考察

1, 統合の必要性

統合により、グループ間の人気、競技レベル等の格差を是正し、全国大学選手権への参加校の選定をより明確にできるという利点が考えられる。

2, 統一リーグ形成への課題: 特に早慶明の定期戦について

統一リーグ化には伝統校による定期戦をどのように組み込むかといった問題がある。実力・人気ともに強い早慶明の3校が2部転落となってしまったとき、観客動員数の高い3校による定期戦をどのように組むか。その場合に試合数過剰にならないかなどの問題点が残されている。

おわりに

「対抗戦グループ」・「リーグ戦グループ」という形式はラグビーに根付く「対抗戦意識」が強く影響しており、歴史的背景のもとに生まれたこの形式を解消、発展させるためには、その歴史と同じくらい多くの時間が必要である。